2022年2月2日

女子体操競技情報31号

（公財）日　本　体　操　協　会
パリオリンピック強化委員会
女　子　体　操　競　技　強　化　本　部
審判委員会体操競技女子審判本部

日本体操協会では、パリオリンピック強化委員会体操競技女子強化本部による2022年強化指針と審判委員会体操競技女子審判本部による2022年採点指針をここに通達し、この通達をもって適用といたします。

2022 年　強化指針

パリオリンピック強化委員会
女子体操競技強化本部長
田中　　光

全体として

2024 パリ五輪までの 2 年はあっという間であるため、ルールの改正もあることから早急な選手強化の対応が求められています。

基本に忠実で正確な技術からなる「美しい体操」を目指すとともに「跳馬の D スコアアップ」、「ダンス系の技の高さと姿勢の改善」、「タンブリング技術の向上」、「段違い平行棒の支持回転系技の技術の向上」、さらに芸術性の高い演技を目指した「コレオプログラムの充実」に取り組みたいと思います。

2022 リバプール世界選手権大会にて、団体入賞、個人総合入賞、1 つ以上のメダル獲得を強化目標とし、直往邁進の精神で強化に取り組みたいと思います。

＜跳馬＞

D スコア 5.00 以上の技は必須。積極的に D 5.20、D 5.40、D 5.80 の技に取り組む。

高い D スコアの跳躍技を推奨しつつも、美しい姿勢と正確で雄大な跳躍を目指す。

＜段違い平行棒＞

高難度の手放し技の実施、組み合わせ点を多く得られる演技構成を推奨しつつも、美しい姿勢と正確で完成度の高い演技を目指す。2022 年は特に支持回転系技の技術の向上を目指す。

＜平均台＞

高い D スコアの演技を推奨しつつも、技の正確性と全習での安定感を最重要視し、美しい姿勢と正確で完成度の高い演技を目指す。2022 年は特にダンス系技のジャンプの高さアップと姿勢の改善を目指す。

＜ゆか＞

高い D スコアの演技を推奨しつつも、美しい姿勢と正確で完成度の高い演技を目指す。2022 年は特にビッグタンブリングにつながるロンダート～後転とびの技術の獲得、ダンス系技のジャンプの高さアップと姿勢、演技全体の表現力の改善を目指す。

2022 年　採点指針

審判委員会体操競技女子審判本部

全体として

昨年開催された東京オリンピック、世界選手権では村上茉愛選手、芦川うらら選手がメダルを獲得するなど日本女子選手の目覚ましい活躍が見られました。この代表選手の活躍は日本女子体操界に大きな功績を残したことはもちろん、関係者一同に大きな喜び、希望をもたらしてくれました。しかし、世界の舞台で日本女子選手が高く評価を受けたこととは裏腹に先の２つの大会を経て現在の日本女子体操が抱える課題が浮き彫りになったことも確かです。次のパリオリンピックでは団体戦でのメダル獲得が最大の目標であり、その目標を達成するためには高いＤスコアの演技構成は必須になってきますが、ただ闇雲にＤスコアを上げていくことだけを目指すだけでは成し遂げられません。強化指針に掲げられている通り、美しい体線での技の実施が重要であり必須です。開催まで２年に迫った 2024 パリオリンピックに向けてはもちろん、その次の 2028 ロサンゼルスオリンピックの世代の選手に向けても非常に重要な課題であると言えます。2022 年国内すべての競技会において美しい姿勢での演技を採点上の最重要項目とします。特に跳馬を除く３種目については、高いＤスコアを狙っている演技に対しても各技の姿勢欠点はもちろん演技全体を通した身体の姿勢や足先の美しさに欠ける演技は厳密に減点し、美しい姿勢での演技との差を明確化させます。

2022 年の国内競技会では以下の２項目を採点上の最重要項目とし採点をします。

① 膝、つま先の緩みがなく手先足先までコントロールされた美しい姿勢での演技
② 欠点のない正確な技の実施

各種目について

日本の現状を踏まえて望ましい演技として評価する方向性を以下のように示す。

＜跳馬＞

- Ｄスコアの高い跳躍技の実施
- 高さと距離を伴うスピード感のあるダイナミックな跳躍

【採点上の留意点】

- ダイナミックさに欠ける跳躍については、跳躍の大きさだけではなく、技の難易度から受ける迫力や雄大性などを加味し、第 10 章 跳馬「種目特有な実施減点」の「ダイナミックさに欠ける（0.10/0.30）」の減点項目に則り、明確に差をつける。

- 高い難度の跳躍技を奨励するが、各局面において著しい技術不良が見られる跳躍については、第8章「一般欠点と減点表」、第10章 跳馬「種目特有な実施減点」の減点項目に則り、厳密に減点をする。（各競技会の主旨や出場する選手層を考慮し、それに応じた適切な評価をする。）

＜段違い平行棒＞

- 腕の曲がりや膝、つま先の緩みのない美しく伸びた体線での正確な技の実施
- 技の振幅が大きいダイナミックな演技
- 多様な空中局面を伴う技を組み入れ、組み合わせ点を獲得できる演技構成

【採点上の留意点】

- 上記指針の内容に沿わない**姿勢欠点のある実施**に対しては、第8章「一般欠点と減点表」、第11章 段違い平行棒「種目特有な実施減点」の減点項目に則り、**厳密に減点**をする。
- け上がり、倒立などの基本技の姿勢においては特に注視し、膝やつま先の緩みが見られる実施や、身体の姿勢が悪い実施に対しては、第8章「一般欠点と減点表」、第11章 段違い平行棒「種目特有な実施減点」の「倒立、または振り上げ倒立の身体の姿勢が悪い（0.10/0.30）」の減点項目に則り減点をし、明確に差をつける。

＜平均台＞

- 立ち姿勢、つま先まで意識された美しい姿勢による芸術的な演技
- アクロバット系、ダンス系の技が正確で熟練された演技
- 高いD スコアの獲得を目指した演技構成

【採点上の留意点】

- 頭部や胴体、肩、腕の位置が悪い、つま先が伸びない、足が内向き、つま先立ちが不十分な演技に対しては、「演技全体を通して芸術的表現に欠ける」の減点項目に則り、**厳密に減点**をする。
- ダンス系の技は特に注視し、**姿勢欠点のある実施**、**正確さに欠ける実施**には「身体の姿勢の減点（0.10/0.30/0.50）」、「高さ（0.10/0.30）」、「正確さ（0.10）」の減点項目に則り、**厳密に減点**をする。
- 上記指針の内容に沿わない演技に対しては、第8章「一般欠点と減点表」、第12章 平均台「芸術性と構成の減点」、「種目特有な実施減点」の減点項目に則り、明確に差をつける。

＜ゆか＞

- 立ち姿勢、つま先まで意識された美しい姿勢による芸術的な演技
- アクロバット系、ダンス系の技が正確で熟練された演技
- 観衆を魅了することができる音楽と振り付け
- 高いD スコアの獲得を目指した演技構成

【採点上の留意点】

- 頭部や胴体、肩、腕の位置が悪い、つま先が伸びない、足が内向き、べた足の演技に対しては、「演技全体を通して芸術的表現に欠ける」の減点項目に則り、**厳密に減点**をする。
- ダンス系の技は特に注視し、**姿勢欠点のある実施**、**正確さに欠ける実施**には「身体の姿勢の減点（0.10/0.30/0.50）」、「高さ（0.10/0.30）」、「正確さ（0.10）」の減点項目に則り、**厳密に減点**をする。
- 上記指針の内容に沿わない演技に対しては、第８章「一般欠点と減点表」、第 13 章 ゆか「芸術性と構成の減点」、「種目特有な実施減点」の減点項目に則り、明確に差をつける。

【跳躍や演技を試みなかった場合の国内対応】

国内競技会においては、従来通り、グリーンライトの点灯または D1 審判員からの演技開始の合図の後、選手が D 審判員に挨拶をし、跳躍板や器具に触れてから再び挨拶することで 0.00 点として扱うこととする。（すべての種目）

【落下による中断時間中に止血が必要であると判断された場合の国内対応】

国内競技会においては、選手が器械から落下した際、演技続行の意志はあるが、止血が必要な状態であると医師または審判長が判断した場合、落下による中断時間（UB30 秒、BB10 秒）を超えて演技を中断しても減点なしで演技を再開することを認める。落下による中断時間（UB30 秒、BB10 秒）は、止血後から計時を始める。ただし、演技続行できないような怪我と医師が判断した場合は、この限りではない。（状態によっては演技続行不可と判断されることもある）

付録

【タイブレークの基準について】

＊この規則は、FIG 競技規則によるオリンピック、世界選手権等 FIG 主催の競技会に向けた規則です。国内の競技会においては、各競技会の主催団体によって、この規則を準用または参考にし設定をしてください。

競技規則　FIG Technical Regulations 2022（抜粋）

第２章　体操競技に関する特別規定

第７条　タイブレーク　ルール

第７条 7.1 予選

すべての決勝への資格取得：
同点の場合、どの順位においても、以下の通りの基準で順位を決定させる：

第７条 7.1.1 団体決勝のための予選

同点の場合、団体総合決勝の予選のどの順位においても資格取得にむけてのランキングは以下の基準で決定される：

１．最終得点のうち、男子は各種目のチーム得点の高い５種目の合計、女子はチーム得点の高い３種目の合計の得点が高いチームが上位となる（それでも同点の場合は、男子は得点の高い４種目、３種目、２種目、１種目の合計、女子は得点の高い２種目、１種目の合計の得点）

さらに同点の場合は、どちらのチームも同じ順位とする。

第７条 7.1.2 個人総合決勝のための予選

同点の場合、個人総合決勝の予選のどの順位においても資格取得にむけてのランキングは以下の基準で決定される：

１．最終得点のうち、男子は得点の高い５種目の合計、女子は得点の高い３種目の合計の得点が高い選手が上位となる（それでも同点の場合は、男子は得点の高い４種目、３種目、２種目、１種目の合計、女子は得点の高い２種目、１種目の合計の得点）

２．さらに同点の場合は、すべての種目のEスコアの合計が高い選手が上位となる

３．さらに同点の場合は、すべての種目のDスコアの合計が高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第７条 7.1.3 種目別決勝のための予選

同点の場合、どの種目、どの順位においても、**跳馬を除き**、種目別決勝のための資格取得にむけてのランキングは以下の基準で決定される：

１．Eスコアが高い選手が上位となる
２．Dスコアが高い選手が上位となる
さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

跳馬の種目別決勝のための予選における得点が同順位であった場合、どの順位においても資格取得に向けてのランキングは以下の基準で決定される：

１．最終スコアを算出する前の２回の跳躍のスコアのうち、最も高いスコアをもつ選手が上位となる
２．２回の跳躍のうち、どちらか一方のEスコアが高い選手が上位となる
３．２回の跳躍のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる
さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第７条 7.2 決勝

第７条 7.2.1　団体決勝

同点の場合、団体総合決勝のどの順位においても、ランキングは以下の基準で決定される：

１．最終得点のうち、男子は各種目のチーム得点の高い５種目の合計、女子はチーム得点の高い３種目の合計の得点が高いチームが上位となる（それでも同点の場合は、男子は得点の高い４種目、３種目、２種目、１種目の合計、女子は得点の高い２種目、１種目の合計の得点）
さらに同点の場合は、どちらのチームも同じ順位とする。

第７条 7.2.2 個人総合決勝

同点の場合、個人総合決勝のどの順位においても、ランキングは以下の基準で決定される：

１．最終得点のうち、男子は得点の高い５種目の合計、女子は得点の高い３種目の合計の得点が高い選手が上位となる（それでも同点の場合は、男子は得点の高い４種目、３種目、２種目、１種目の合計、女子は得点の高い２種目、１種目の合計の得点）
２．さらに同点の場合は、すべての種目のEスコアの合計が高い選手が上位となる
３．さらに同点の場合は、すべての種目のDスコアの合計が高い選手が上位となる
さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第７条 7.2.3 種目別決勝

最終得点が同順位であった場合、すべての種目のどの順位においても、**跳馬を除き**、ランキングは以下の基準で決定される：

１．Eスコアが高い選手が上位となる

２．Dスコアが高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

跳馬　種目別決勝

種目別決勝における最終得点が同順位であった場合、どの順位においてもランキングは以下の基準で決定される：

１．最終スコアを算出する前の２回の跳躍のスコアのうち、最も高いスコアをもつ選手が上位となる

２．２回の跳躍のうち、どちらか一方のEスコアが高い選手が上位となる

３．２回の跳躍のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

【マークをつける位置の基準について】

採点規則2.3.2　競技の服装

f) 現行のFIG規定に従い、自国のマークまたはエンブレムをレオタード／ユニタードにつけなければならい。

2017–2020　FIG　広告規定および競技服装　抜粋

第６章　国のマーク

– すべての競技者は自国（国内では所属）を証明するマークを表示しなければならない。
　このマークは、以下のものでなければならない：
– 国旗または国名（フルネームもしくは国名を略したコードでもよい）
　＊国内では所属のマークまたは所属名（略称も可）
– 最大のサイズは適切な大きさでかつ上品であること
– 全体の面積は３０㎠以上とする
– マークの表示は以下のとおりに付ける：
　レオタード／ユニタード：美観を損なわない場所ならばどこに付けてもよい。
　チームの場合、すべての選手のマークは同一でなければならない。
– 自国のマークはそれぞれの選手に少なくとも１つは表示されなければならない。

第 32 回オリンピック競技大会（2020/東京）審判員報告

審判委員会体操競技女子審判本部

開催地：日本　東京都　　有明体操場
大会期日：2021 年 7 月 20 日（火）～8 月 3 日（火）
スケジュール：

7 月 19 日（月）宿舎到着
7 月 20 日（火）FIG 女子技術委員・D 審判会議（オンライン）
7 月 21 日（水）審判会議（オンライン）・男子ポディウムトレーニング
7 月 22 日（木）女子ポディウムトレーニング
7 月 23 日（金）（総合開会式）
7 月 24 日（土）男子競技　予選
7 月 25 日（日）女子競技　予選
7 月 26 日（月）男子競技　団体決勝
7 月 27 日（火）女子競技　団体決勝
7 月 28 日（水）男子競技　個人総合決勝
7 月 29 日（木）女子競技　個人総合決勝
7 月 30 日（金）（トランポリン競技）
7 月 31 日（土）（トランポリン競技）
8 月　1 日（日）男女競技　種目別決勝 1 日目
8 月　2 日（月）男女競技　種目別決勝 2 日目
8 月　3 日（火）男女競技　種目別決勝 3 日目
8 月　4 日（水）現地解散

参加国

選手　48 カ国　98 名

チーム出場：12 カ国

BEL, CAN, CHN, ESP, FRA, GBR, GER, ITA, JPN, NED,ROC*, USA

（チーム＋個人 2 名=3 カ国・チーム＋個人 1 名=２カ国・チームのみ=7 カ国）

（*ROC =RUS）

個人出場のみ：36 カ国

AUS, BRA, ARG, AUT, AZE, BLR, CAY, CHI, CRC, CRO, CUB, CZE, EGY, HUN, IND, IRL, ISR, JAM, KOR, MAS, MEX, NOR, PER, POL, POR,RSA, ROU,SGP, SRI, SUI, SVK,SWE, TPE, TUR, UKR, UZB.

選手の平均年齢　21.86 歳

チーム出場国の平均年齢　　最低 17.98（GBR）最高 27.54（NED）

BEL	18.50	GER	26.60
CAN	20.75	ITA	21.85
CHN	19.48	JPN	22.56
ESP	20.56	NED	27.54
FRA	19.52	ROC	19.60
GBR	17.98	USA	20.40

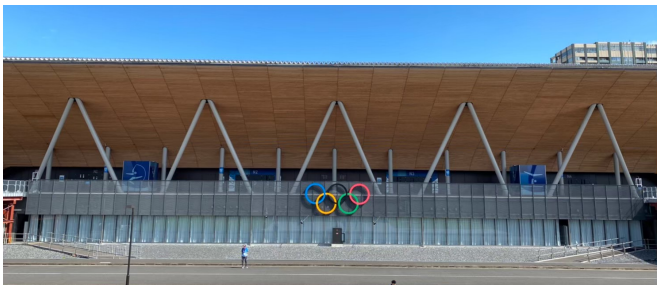
（参考：過去のオリンピックの平均年齢との比較）

	選手数	平均年齢（チーム）
’20 東京	98	21.86
’16 Rio	98	20.69
’12 London	97	20.12
’08 Beijing	98	18.66

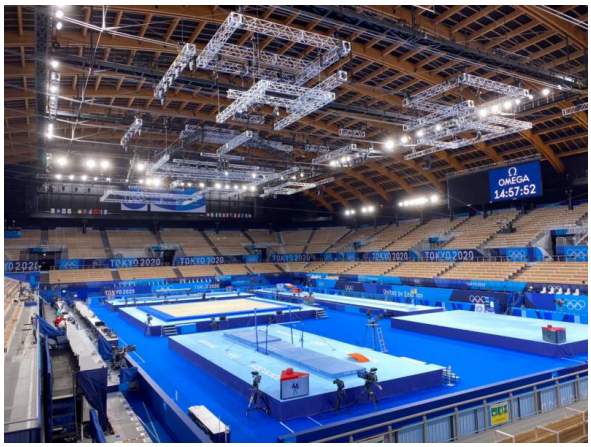
審判：38 カ国（D 審判 8 名・R 審判 8 名・E 審判 22 名）

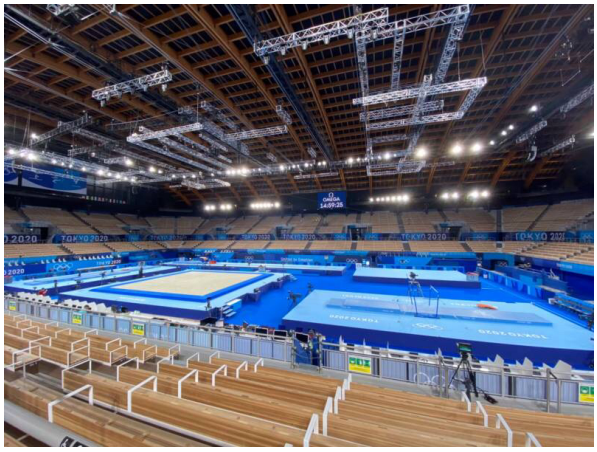
CHN , CZE , POL , ITA , JPN , LAT , NOR , SLO , AUS , AUT , BEL , BLR , BRA , CAN , CHI , COL , CRO , CYP , EGY , FRA , GBR , HUN , ISL , ISR , NED , SWE , UZB , GER , MEX , RUS , SUI , TPE , TUR , UKR , USA , QAT , NZL , KOR

会場：有明体操場



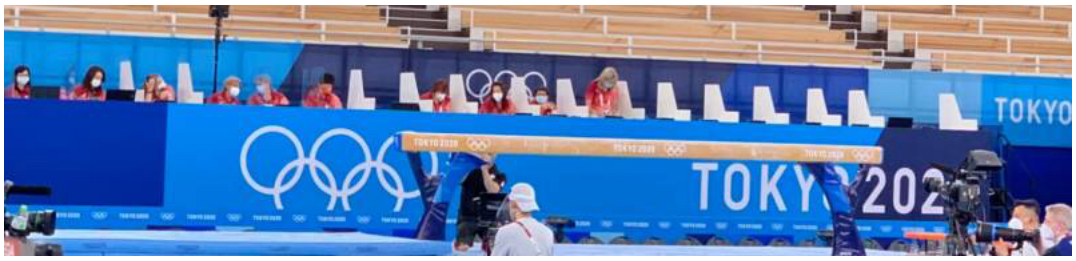
（観客席から見た本会場）





（審判席）

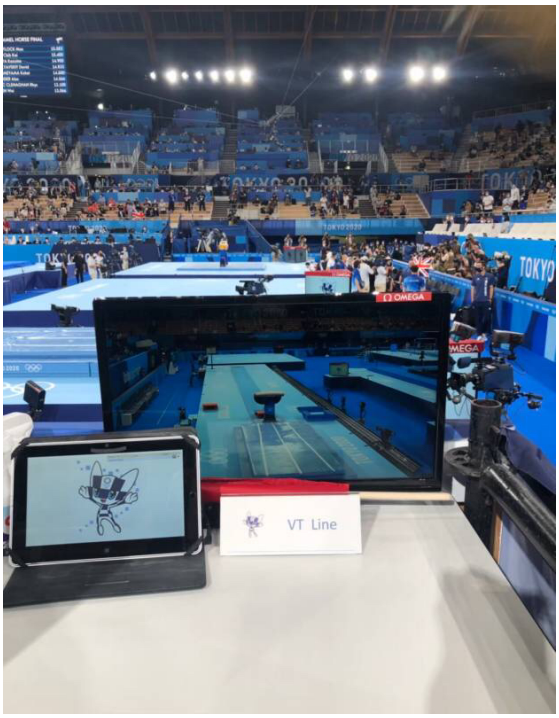
審判席は、各種目のポディウムの外側に並列に配置されており、各審判員の席には一人ずつ仕切りがあり、視界を限定させているような席であった。

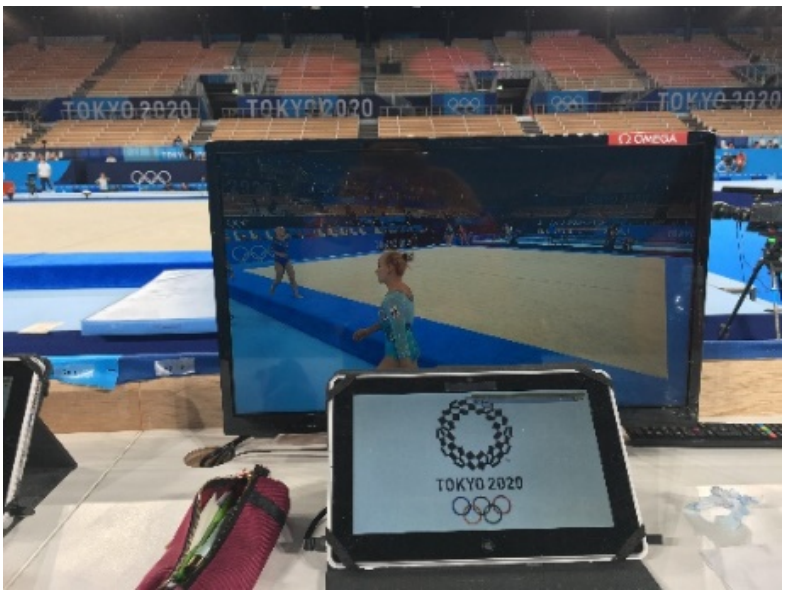


ライン審判員のモニター

ライン審判員の席は、D 審判団、E 審判団と同じ並びに位置し、境界線の踏み越しはモニターを見て確認をし、判断をするものであった。特にゆかの奥のコーナーを見るのは非常に見えにくく踏み越しを判断するのが難しいとのことであった。

選手がラインを踏み越したことを確認した場合は、ライン審判はその場で旗を揚げることになっていたが、演技している選手はもちろん観客席からも旗が揚がったことを確認しにくい状況であった。





審判編成：

今回の大会では FIG 技術委員は以下のように配置されていた。

審判長： Donatella SACCHI

上級審判員： Kym DOWDELL, Tatiana Borisovna PERSKAIA

Supervisor：跳　　馬　Elena DAVYDOVA

：段違い平行棒　Liubov ANDRIANOVA

：平　均　台　Johanna GRATT

：ゆ　　か　Qiurui ZHOU

今大会は事前に FIG 技術委員よりすべての審判員が指名され決定されており、予選から決勝までのすべての競技をその審判員のみで担当することになっていた。D 審判は事前に種目担当が決まっており、すべての競技で同じ種目を担当し、R 審判、E 審判はそれぞれの競技の前に抽選され決定された。アシスタントについては、開催国で選出することになっており、すべての競技を通して国内審判員があたった。

段違い平行棒（D２）：大森智子

アシスタント：跳　　馬　線審：佐原礼香

段違い平行棒　計時：五藤佳奈

平　均　台　計時：白川千尋、高橋洋子

ゆ　　か　計時：佐野吉見

線審：阿部恵子、志村美紀

審判会議：

今大会はコロナ感染予防策を徹底させた大会であったため、会議はすべてオンラインにて実施された。そのため、通常ポディウムトレーニングの前に実施される審判に向けてのインストラクションもオンラインでの実施であったため、採点研修は映像を事前に審判員に配信され、オンラインでの会議では映像を流さず、採点シートを画面に映し口頭で説明するのみであった。特にオリンピックにむけて大幅なルール変更もないため、各種目の解説も短く簡潔に済まされた。一番印象的であったのは、審判長を務める FIG 技術委員長である Donatella SACCHI 氏が示した採点の指針の話である。審判会議だけでなく、各競技の前に行われた打ち合わせでも毎回「芸術性」についての話に時間をかけ、熱意を込めて話をされたことにかなりのインパクトを受けた。「私たちの競技は Artistic Gymnastic である。芸術的でなければならない。」そして「男子体操ではない、男子とは違う」ということを何回も何回も強く話された。本来の目指すべき体操はどうあるべきか、我々審判がどういった体操を評価すべきかということをまざまざと感じさせられた。

各種目の得点概況と所感

＜跳馬＞

【団体予選結果】※各国上位３選手の得点

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**USA**	14.966	14.700	14.533	44.199	14.733	6.0	5.4	5.4	**1**	5.60	9.266	9.300	9.133	**1**	9.233
2	**ROC**	14.766	14.466	14.600	43.832	14.611	5.8	5.4	5.4	**2**	5.53	8.966	9.066	9.200	**3**	9.077
3	**FRA**	14.466	14.966	14.233	43.665	14.555	5.4	5.8	5.4	**2**	5.53	9.166	9.166	8.933	**2**	9.088
4	**CAN**	14.533	14.133	14.966	43.632	14.544	5.0	5.4	6.0	**4**	5.47	9.133	8.733	8.966	**7**	8.944
5	**GBR**	14.533	14.500	14.166	43.199	14.400	5.4	5.4	5.4	**5**	5.40	9.133	9.100	8.766	**6**	9.000
6	**ITA**	14.233	14.333	14.200	42.766	14.255	5.4	5.4	5.4	**5**	5.40	8.833	8.933	8.800	**10**	8.855
7	**JPN**	13.733	14.433	14.266	42.432	14.144	5.0	5.4	5.0	**9**	5.13	8.733	9.033	9.266	**5**	9.011
8	**CHN**	13.633	14.300	14.433	42.366	14.122	4.6	5.4	5.6	**8**	5.20	9.033	8.900	8.833	**8**	8.922
9	**NED**	14.433	14.100	13.600	42.133	14.044	5.4	5.0	4.6	**10**	5.00	9.033	9.100	9.000	**4**	9.044
10	**GER**	13.933	14.266	13.500	41.699	13.900	5.0	5.4	5.4	**7**	5.27	8.933	8.866	8.400	**11**	8.733
11	**ESP**	13.533	13.466	14.300	41.299	13.766	4.6	4.6	5.4	**12**	4.87	8.933	8.866	8.900	**9**	8.900
12	**BEL**	13.766	13.900	13.400	41.066	13.689	5.4	5.0	4.6	**10**	5.00	8.466	8.900	8.800	**12**	8.722

【団体決勝結果】

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**ROC**	14.733	14.600	14.466	43.799	14.600	5.8	5.4	5.4	**1**	5.53	8.933	9.200	9.066	**1**	9.066
2	**FRA**	14.500	14.900	14.200	43.600	14.533	5.4	5.8	5.4	**1**	5.53	9.100	9.100	8.800	**3**	9.000
3	**GBR**	14.433	14.433	14.266	43.132	14.377	5.4	5.4	5.4	**4**	5.40	9.033	9.033	8.866	**5**	8.977
4	**USA**	13.766	14.666	14.300	42.732	14.244	5.0	5.4	5.4	**6**	5.27	8.766	9.266	9.000	**2**	9.011
5	**ITA**	14.266	14.166	14.233	42.665	14.222	5.4	5.4	5.4	**4**	5.40	8.866	8.766	8.833	**6**	8.822
6	**JPN**	13.900	14.266	14.183	42.349	14.116	5.0	5.4	5.0	**8**	5.13	8.900	8.866	9.183	**4**	8.983
7	**BEL**	14.033	14.233	13.466	41.732	13.911	5.4	5.8	4.6	**7**	5.27	8.733	8.533	8.866	**7**	8.711
8	**CHN**	12.700	12.600	14.066	39.366	13.122	5.4	5.4	5.6	**3**	5.47	7.600	7.500	8.566	**8**	7.889

１．日本チームの当該種目成績

１）予選

予選においては、４人中１名が着地で転倒してしまい、他３名は過失なくまとめたが、うち２名は着地で大きなステップになってしまったり、着地姿勢が低くなったりしたことでスコアを伸ばすことが出来ず、種目成績は 12 カ国中７位という成績であった。

村上選手は種目別決勝進出を目指し２回の跳躍を実施したが、E スコアを伸ばすことが出来ず決勝に進出することはできなかった。

２）団体決勝

決勝においては、３選手とも大きな過失、欠点のない跳躍であったが、高得点には繋がらず、種目順位は８カ国中６位という成績であった。D スコアの合計得点を比較する

と、日本は団体予選 15.40(5.13)で 12 チーム中 8 位、団体決勝でも合計 15.40(5.13)で決勝進出 8 チーム中最下位であった。E スコアの順位だけを見ると予選よりも順位は上回っているものの、得点は予選の得点を上回ることができず、3 名の E スコアの平均は 9.000 を超えることが出来なかった。

２．D スコアについて

予選に出場した選手 84 名（103 跳躍）のうち 49%の選手が、個人総合決勝では 24 名の 75%、団体決勝では 24 名の 83%が D スコア 5.40 以上の跳躍技を実施している。種目別決勝進出者にいたっては 8 名 16 跳躍すべてが 5.40 以上の跳躍技であった。

団体決勝に進出した 8 チームで比較すると、チーム 3 名のうち 5.40 以上の D スコアの跳躍技を実施している選手が 3 名中 1 名なのは日本だけである。他 7 カ国は 3 名とも 5.40 以上であるか、3 名中 2 名が 5.40 以上の跳躍技を実施している。現行ルールで D スコア 5.40 以上の跳躍技を確実に実施できる選手をチームの中に何名揃えることができるのかは団体予選を通過し、決勝において上位に食い込めるかどうかに大きく影響を与える。

種目別決勝においては、出場したすべての選手が 2 本とも D スコア 5.40 以上の跳躍技を実施したが、8 名中 5 名が 2 本のうちの 1 本は D スコア 6.00 以上の跳躍技を実施していた。予選、決勝とも上位の選手は D スコア 6.00 以上の跳躍技を実施しており、団体、個人、種目別すべてにおいてメダルの獲得を目指すためには D スコア 6.00 の跳躍技の習得が必須である。

３．E スコアについて

今大会の跳馬の審判席は、跳馬のポディウムよりもかなり高い位置に設置され、審判員が見下ろすような状態で採点をしたこともあり、特に第 2 空中局面の高さについては突出した突上がりと高さがなければ高得点にはならず、予選に出場した 84 名のうち 9.200 以上の E スコアを獲得できたのは 7 名のみで全体の 8%に過ぎなかった。（第 1 跳躍のみの比較）その中で突出して目立っていたのは言わずと知れた USA の BILES 選手はもちろんであるが、同様に BRA の ANDRADE 選手の跳躍も引けを取らない高さとダイナミックさがあり圧巻の跳躍を見せ高得点を獲得した。残念ながら BILES 選手は種目別決勝は棄権であったが、ANDRADE 選手は第 1 跳躍（D6.00 E9.266）第 2 跳躍（D5.80　E9.200）ともに高さ、スピード、迫力ある跳躍で金メダルに輝いた。

全体の採点の傾向としては、伸身宙返りの跳躍技で第 2 空中局面において伸身姿勢が保てずに屈身姿勢が見られる実施や着地姿勢が低い跳躍、また着地の減点については厳密に減点がされていた。伸身姿勢が保てない実施、着地姿勢については審判員が特に注視して採点されるため、着地前に腰を折り曲げた姿勢を見せず高い体勢で着地をとることが高い E スコア獲得へと繋がることが言える。

４．所感

跳馬に関しては D スコアを上げるべく長年強化してきた種目である。国内競技会では高

いDスコアの跳躍技に挑戦してくる選手も増えてきているが、今大会日本チームは、村上選手がロンダート後転とび～後方伸身宙返り2回ひねり(Dスコア5.40)、畠田選手・平岩選手・杉原選手はロンダート後転とび～後方伸身宙返り1回半ひねり(Dスコア5.00)の跳躍技で挑んだため、他の国と比較してDスコアが低い結果となった。団体決勝においては、予選よりも高いDスコアの跳躍技を実施してきた国もあり、さらに差が広がった。跳馬は、高得点を狙いやすい種目であるため、団体戦においては現行ルールでDスコア5.40以上の跳躍技をチームの全選手が跳躍することが出来なければ、上位国と戦うことは困難であると痛感した。国内競技会では現行ルールでDスコア4.60の跳躍技を実施できる選手が多くなってきているが、Dスコア5.40以上の跳躍技となると極端に少なくなるのが現状である。パリ五輪に向け団体メダル獲得に大きな鍵を握る種目でもあるため、さらに高いDスコアの跳躍の習得を目指した早急な強化が必要である。

また、Eスコアに関しても日本選手の跳躍は、高得点を獲得している選手と比較すると着手から突き上がるスピードの速さや高さ、ダイナミックさがもの足りない印象を受け、Eスコアの平均は予選では9.011、団体決勝では8.983という結果であった。着地の乱れが少なく着地姿勢にも大きな減点がないような実施でも高さと距離がなく、ダイナミックさに欠ける跳躍については、Eスコア9.000には達せず、やはり跳躍のスピード、高さがなければ高得点を得ることができない。高いDスコアの跳躍技を実施できる選手は、着手から突き上がるスピード、第2空中局面の大きさがあり、それ故に余裕のある着地をとることができ、高得点に繋がっている。跳馬で高得点を獲得しさらに順位を上げていくためには、高いDスコアの跳躍技の習得は必須ではあるが、Eスコアにおいても9.000以上のスコアを獲得することが必須である。着手から最高到達点まで突き上がるスピードとその高さ、そして着地の先取りをした安定した着地ができる技術を身につけていく必要がある。そのためには、まずは助走を含めた全体のスピードアップを図り、第2空中局面の高さある跳躍の習得が必須である。

＜段違い平行棒＞

【団体予選結果】※各国上位3選手の得点

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**ROC**	14.766	14.933	14.866	44.565	14.855	6.4	6.3	6.3	**1**	6.33	8.366	8.633	8.566	**1**	8.522
2	**USA**	14.566	15.200	14.100	43.866	14.622	6.2	6.6	5.8	**2**	6.20	8.366	8.600	8.300	**2**	8.422
3	**BEL**	15.366	14.100	13.633	43.099	14.366	6.7	5.9	5.6	**3**	6.07	8.666	8.200	8.033	**4**	8.300
4	**CHN**	14.700	13.500	14.433	42.633	14.211	6.2	5.7	6.0	**5**	5.97	8.500	7.800	8.433	**5**	8.244
5	**GER**	14.066	14.700	13.866	42.632	13.900	5.9	6.2	5.5	**6**	5.27	8.166	8.500	8.366	**3**	8.733
6	**FRA**	14.566	13.666	13.966	42.198	14.066	6.4	5.8	5.9	**4**	6.03	8.166	7.866	8.066	**8**	8.033
7	**ITA**	13.933	14.233	13.700	41.866	13.955	5.7	5.9	5.9	**7**	5.83	8.233	8.333	7.800	**6**	8.122
8	**GBR**	13.066	13.800	13.833	40.699	13.566	5.0	5.7	5.8	**10**	5.50	8.066	8.100	8.033	**7**	8.066
9	**ESP**	12.700	12.866	14.400	39.966	13.766	5.3	4.9	6.2	**11**	4.87	7.400	7.966	8.200	**9**	8.900
10	**NED**	13.000	13.133	13.533	39.666	14.044	5.5	5.3	5.4	**12**	5.00	7.500	7.833	8.133	**10**	9.044
11	**JPN**	14.133	12.133	13.366	39.632	13.211	6.1	5.4	5.3	**8**	5.60	8.033	6.733	8.066	**11**	7.611
12	**CAN**	12.800	13.000	12.900	38.700	14.544	5.7	5.0	5.9	**9**	5.47	7.100	8.000	7.000	**12**	8.944

【団体決勝結果】

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**ROC**	14.900	14.933	14.866	44.699	14.900	6.4	6.3	6.3	**1**	6.33	8.500	8.633	8.566	**1**	8.566
2	**USA**	14.166	15.400	13.700	43.266	14.422	5.9	6.8	5.8	**2**	6.17	8.266	8.600	7.900	**2**	8.255
3	**GBR**	13.566	14.166	14.033	41.765	13.922	5.7	5.8	5.8	**6**	5.77	7.866	8.366	8.233	**3**	8.155
4	**BEL**	15.400	13.766	12.466	41.632	13.877	6.7	5.9	5.3	**3**	5.97	8.700	7.866	7.166	**6**	7.911
5	**ITA**	13.900	14.166	13.433	41.499	13.833	5.7	6.0	5.7	**5**	5.80	8.200	8.166	7.733	**4**	8.033
6	**FRA**	14.200	13.733	13.466	41.399	13.800	6.1	5.8	5.8	**4**	5.90	8.100	7.933	7.666	**7**	7.900
7	**CHN**	13.333	13.233	14.500	41.066	13.689	6.1	5.2	6.0	**6**	5.77	7.233	8.033	8.500	**5**	7.922
8	**JPN**	14.100	12.700	13.333	40.133	13.378	6.1	5.7	5.3	**8**	5.70	8.000	7.000	8.033	**8**	7.678

１．日本チームの当該種目成績

各種目の種目成績の一覧比較してみれば一目瞭然であるが、他 3 種目では種目成績は予選通過できる 8 位以内に入っているものの、段違い平行棒については予選で 12 チーム中 11 位、決勝 8 チーム中 8 位という結果である。予選、決勝共に大過失が出てしまったことが大きな要因ともなっているが、D スコアだけの順位でも上位とは大きく差をつけられていることは明白であり、チームでのメダル獲得の目標達成には課題が残る結果となってしまった。

２．D スコアについて

予選の各チームの D スコアと順位を照らし合わせてみると、上位に食い込むためには D スコアが平均 6.00 以上、または 6.00 により近いスコアが必要であるといえる。予選決勝とも種目成績 1 位の ROC については、チーム得点に入る 3 名とも 6.00 以上の D スコアであり、チームの D スコア平均が 6.00 以上の USA や BEL は 6.70、6.80 という抜きん出たスコアを獲得する選手を有しており、いずれもこの種目のチーム得点が総合順位に大きく影響を及ぼしている。BEL の DERWAEL 選手は、予選、団体決勝、個人総合決勝、種目別決勝すべての競技で安定した実施でいずれも D スコア 6.70 を獲得している。今大会のすべての競技での最高の D スコアは団体決勝における LEE 選手（USA）の演技で D スコア 6.80 であった。

DERWAEL 選手、LEE 選手は、ともに演技中に空中局面の技を 7 つ組み込み、DERWAEL 選手は組み合わせ点 0.70、LEE 選手は 1.00 を獲得し、圧倒的な強さを見せた。

また、今大会で種目別決勝に進出した 8 名およびリザーブ 3 名の予選の D スコアは 6.20～6.70、種目別決勝での 8 名の演技の D スコアは、失敗した選手もいたため予選よりは低くなったが 5.90～6.70、メダルを獲得した選手は 6.20～6.70 であった。

【団体予選　種目上位 6 チームとの DV/CV の比較】※各国上位 3 選手の得点

種目順位	国名	上位 3 人のDV			合計	平均	上位 3 人のCV			合計	平均
		選手A	選手B	選手C			選手A	選手B	選手C		
1	**RUS**	3.8	3.6	3.6	11.0	3.7	0.6	0.7	0.7	2.0	0.7
2	**USA**	3.4	3.6	3.8	10.8	3.6	0.4	0.6	0.8	1.8	0.6
3	**BEL**	3.7	3.3	4.0	11.0	3.7	0.2	0.3	0.7	1.2	0.4
4	**CHN**	3.6	3.6	3.2	10.4	3.5	0.4	0.6	0.2	1.2	0.4
5	**GER**	3.2	3.7	3.4	10.3	3.4	0.3	0.5	0.5	1.3	0.4
6	**FRA**	3.4	3.5	3.8	10.7	3.6	0.4	0.4	0.6	1.4	0.5
11	**JPN**	3.0	3.1	3.6	9.7	3.2	0.3	0.3	0.5	1.1	0.4

上位 2 カ国を除けば CV については日本とその他の上位国との差はさほど開いていないが、日本は予選で大過失があり予定しているスコアを獲得できなかったことが要因になっているものの DV は上位国から比べて低いことが伺える。予選上位 6 カ国の DV の平均は少なくとも 3.40 あり、CV の差がないことを考えると高い DV の獲得が上位に食い込むには必須である。

【団体決勝　各チームの DV と CV】

種目順位	国名	上位 3 人のDV			合計	平均	上位 3 人のCV			合計	平均
		選手A	選手B	選手C			選手A	選手B	選手C		
1	**RUS**	3.6	3.6	3.8	11.0	3.7	0.7	0.7	0.6	2.0	0.7
2	**USA**	3.4	3.4	3.8	10.6	3.5	0.4	0.5	1.0	1.9	0.6
3	**GBR**	3.4	3.3	3.4	10.1	3.4	0.3	0.5	0.4	1.2	0.4
4	**BEL**	3.7	3.1	4.0	10.8	3.6	0.2	0.2	0.7	1.1	0.4
5	**ITA**	3.1	3.4	3.2	9.7	3.2	0.6	0.6	0.5	1.7	0.6
6	**FRA**	3.4	3.5	3.8	10.7	3.6	0.4	0.3	0.3	1.0	0.3
7	**CHN**	3.0	3.6	3.6	10.2	3.4	0.2	0.4	0.5	1.1	0.4
8	**JPN**	3.0	3.4	3.6	10.0	3.3	0.3	0.3	0.5	1.1	0.4

3．E スコアについて

予選を経てきている大会でもあるため、技術欠点や姿勢欠点が目立つ演技はあまり見られず、高い D スコアを有する選手は E スコアも高く、難しい技や組み合わせを実施できる高い技術を持つ選手は基本的な技や運動の質が高く、姿勢も良いことが伺える。言い換えれば、姿勢欠点のない質の高い運動が高難度の技や組み合わせの実施に繋がるということが言える。

日本選手は、残念ながら予選、団体決勝で大過失および大過失同等の実施となってしまった演技があり、6 点台、7 点台のスコアがチーム得点に入った。団体決勝の成績を見ると、上位 2 チーム（ROC、USA）が群を抜いており、3 位以下 6 チームはスコアの差はわずかであり、実施が大きく成績を左右する状況である。各チームの DV と CV の比較を見ても上位 2 チームを除けば突出して DV・CV が高いチームがあるわけではなく、種目順位 3 位（総合決勝 3 位でもある）に入った GBR は段違い平行棒の D スコアの順位は 6 位、3 人の平均も 5.77 で、日本とも差はなく、団体決勝で失敗せず安定した演技を実施したことがメ

ダル獲得に繋がった。現在の競技方法では演技をする３人すべてのスコアがそのままチーム得点となるため、チーム戦ではいかに安定した演技を実施できるか、オリンピックや世界選手権の決勝という場で実力を発揮できる競技力、調整力を培うことが重要である。

＜平均台＞

【団体予選結果】※各国上位３選手の得点

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	CHN	14.100	14.333	13.966	42.399	14.133	6.0	6.2	6.0	1	6.07	8.100	8.133	7.966	3	8.066
2	ROC	13.866	13.733	14.000	41.599	13.866	5.6	5.5	5.8	4	5.63	8.266	8.233	8.200	1	8.233
3	USA	14.066	14.200	13.066	41.332	13.777	6.5	6.2	5.2	2	5.97	7.566	8.000	7.866	7	7.811
4	BEL	13.033	13.766	13.666	40.465	13.488	4.9	5.4	5.5	8	5.27	8.133	8.366	8.166	2	8.222
5	JPN	13.000	13.533	13.466	39.999	13.333	5.2	5.6	5.7	5	5.50	7.800	7.933	7.766	6	7.833
6	FRA	13.466	13.233	13.200	39.899	13.300	5.8	5.3	5.2	6	5.43	7.666	7.933	8.000	5	7.866
7	NED	12.333	13.866	13.366	39.565	13.188	5.0	5.8	5.4	7	5.40	7.333	8.066	7.966	9	7.788
8	CAN	14.100	13.300	12.066	39.466	13.155	6.3	5.4	5.3	3	5.67	7.800	7.900	6.766	11	7.489
9	GBR	13.300	12.866	13.033	39.199	13.066	5.2	5.1	5.5	8	5.27	8.100	7.766	7.533	8	7.800
10	ITA	13.133	12.600	13.066	38.799	12.933	5.3	5.3	5.0	10	5.20	7.833	7.300	8.066	10	7.733
11	GER	12.666	12.966	12.333	37.965	12.655	4.8	5.2	4.3	12	4.77	7.866	7.766	8.033	4	7.888
12	ESP	12.666	12.366	12.866	37.898	12.633	5.0	5.2	5.3	11	5.17	7.666	7.166	7.566	12	7.466

【団体決勝結果】

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	CHN	13.966	13.733	13.900	41.599	13.866	6.0	5.8	6.1	1	5.97	7.966	7.933	7.800	3	7.900
2	USA	13.433	14.133	13.666	41.232	13.744	5.6	6.2	5.7	2	5.83	7.833	7.933	7.966	2	7.911
3	JPN	13.333	13.566	13.833	40.732	13.577	5.4	5.4	5.8	4	5.53	7.933	8.166	8.033	1	8.044
4	ROC	14.333	12.566	12.633	39.532	13.177	6.0	5.4	5.3	3	5.57	8.333	7.166	7.333	5	7.611
5	ITA	12.900	13.133	13.075	39.108	13.036	5.3	5.7	4.9	7	5.30	7.600	7.433	8.175	4	7.736
6	GBR	13.300	13.333	12.233	38.866	12.955	5.2	5.7	5.5	5	5.47	8.100	7.633	6.733	6	7.489
7	FRA	12.066	13.566	12.833	38.465	12.822	5.4	5.6	5.1	6	5.37	6.666	7.966	7.733	7	7.455
8	BEL	10.933	13.866	12.200	36.999	12.333	4.9	5.6	5.1	8	5.20	6.033	8.266	7.100	8	7.133

１．日本チームの当該種目成績

１）団体予選・決勝について

予選において総合８位で決勝に進んだ日本チームの当該種目の成績は、出場 12 か国中５位であった。決勝においては日本の３選手とも大きくバランスを崩したり、落下したりすることなく、安定した演技を見せ、当該種目では８か国中３位であり、E スコアにおいては１位の成績であった。

２）種目別決勝について

決勝に進出した芦川選手は、大過失はなかったもののバランスを崩す場面が見受けられ、E スコアが伸びなかったこともあり、６位の成績であった。

２．D スコアについて

D スコアのチーム得点は、日本チームは予選 16.5（平均 5.50）で 5 位、決勝 16.6(平均 5.53)で 3 位であった。

種目別決勝では、8 名中 5 名の選手が 6.00 以上の D スコアであり、中でも優勝した GUAN 選手(CHN)は予選 6.90、決勝 6.60 で群を抜く高い D スコアを有していた。芦川選手は難度点や組み合わせ点を取りこぼすことなく演技し、D スコアでは 6 位（5.90)であった。

平均台上位国である CHN・USA・ROC と日本との D スコア内容比較及び種目別決勝選手の D スコア内容比較は以下の通り。

１）DV について

団体決勝上位国では各選手とも 3.10～3.30 であったのに対し、日本の各選手は 3.20～3.60 であり、日本チームは高難度の技で構成することができていた。

種目別決勝における各選手のＤＶは 3.30～3.50。芦川選手は 3.50 であり、８名の中で最も高い DV を有していた。

【団体決勝上位国と日本の DV】

	選手A	選手B	選手C	合計DV
CHN	3.2	3.3	3.2	9.7
USA	3.1	3.3	3.3	9.7
ROC	3.3	3.2	3.2	9.7
JPN	3.2	3.3	3.6	10.1

【種目別決勝出場選手の DV】

種目別順位	選手名	DV
1	GUAN (CHN)	3.4
2	TANG (CHN)	3.3
3	BILES (USA)	3.3
4	BLACK (CAN)	3.4
5	LEE (USA)	3.3
6	芦川 (JPN)	3.5
7	SARAIVA (BRA)	3.4
8	URAZOVA (ROC)	3.3

２）CV について

団体決勝にて CHN・USA は各選手とも 0.40～0.90 獲得していたのに対し、日本チームは 0.10～0.20 であり、顕著な差があった。CHN はダンス系の技の組み合わせやD/E 難度のダンス系の技と後転とび系の技とを組み合わせた混合の組み合わせを多様に取り入れ、２名の選手が 0.80 と 0.90 の CV をそれぞれ獲得していた。USA は 0.20 の CV を獲得できるアクロバット系の技の組み合わせ（側方開脚伸身宙返り～後方開脚伸身宙返り）及び３つのアクロバット系の技を連続した SB も含めて 0.40 を獲得できる組み合わせ（側方開脚伸身宙返り～後方開脚伸身宙返り～後方開脚伸身宙返り）を組み入れ、CV を積み重ねていた。

種目別決勝では、D スコア 6.00 以上の５名の選手が 0.70～1.20 の CV を有していた。芦川選手については 0.40 であり、上位選手との差が見受けられた。

【団体決勝上位国と日本の CV】

	選手A	選手B	選手C	合計CV
CHN	0.8	0.5	0.9	2.2
USA	0.5	0.9	0.4	1.8
ROC	0.7	0.2	0.1	1.0
JPN	0.2	0.1	0.2	0.5

【種目別決勝出場選手の CV】

種目別順位	選手名	CV
1	GUAN (CHN)	1.2
2	TANG (CHN)	0.7
3	BILES (USA)	0.8
4	BLACK (CAN)	0.8
5	LEE (USA)	1.1
6	芦川 (JPN)	0.4
7	SARAIVA (BRA)	0.3
8	URAZOVA (ROC)	0.2

３．E スコアについて

全体として、「平均を保つための余分な動き(0.10/0.30/0.50)」の減点項目やダンス系の技での「身体の姿勢(0.10/0.30/0.50)」の減点項目を厳密に減点する傾向であり、すべての競技で実施された 147 演技（予選 91 演技、団体決勝 24 演技、個人総合決勝 24 演技、種目別決勝 8 演技）のうち、8.000 以上の E スコアを獲得したのは 30 演技（予選 18 演技、団体決勝 6 演技、個人総合決勝 4 演技、種目別決勝 2 演技)、全体の約 20%であった。その中において、日本は団体決勝で 3 名の平均が 8.000 以上を獲得した唯一のチームであり、採点指針で掲げている「欠点のない美しい姿勢での正確な技の実施」、「安定感のある技の実施による完成度の高い演技」が評価されたと言える。

種目別決勝においては 8.000 以上の選手が 2 名のみであり、その中で芦川選手は脚を上げてしまう過失 (0.30 の減点)があったものの、4 位の E スコア 7.833 であり、一定の評価を得ることができたと言える。

４．所感

今大会における日本チームの当該種目の成績は D スコア・E スコア両面において上位に位置していると言える。今後、チームとしてメダルを狙うには、当該種目を日本の得点源として、チームのメンバー全員が高水準のスコアに照準を合わせ強化していくことが求められる。そのためには、まずは高い D スコアの獲得が重要であり、カウントされる 8 つの技を D 難度と E 難度以上でそろえて高い DV を獲得することに加え、複数の CV により D スコアを上げていく必要がある。CV については、ダンス系の技や混合での組み合わせに日本の選手も取り組んでいるところではあるが、それらを巧みに組み合わせた SB への取組みに工夫が必要である。また、アクロバット系の技の CV や SB は日本選手の取り組みが少ない状況であるが、アクロバット系の技の CV は技と技の間で止まりや余分なステップが入ったりすることがないため、ダンス系の技や混合の組み合わせに比べ、過失がなければ比較的有利に CV を獲得することができることから、今後はアクロバット系の技の連続への取組みを促すことも重要である。

ただし、高難度の技を取り入れても、E スコアが一定の水準に達しなければ、高得点には

つながらない。頭部や肩、胴体の位置及び足先まで意識の行き届いた美しい姿勢のもと、ダンス系の技やアクロバット系の技を習得させることが大前提である。

また、今大会の審判会議では、FIG 技術委員より芸術性について何度も強調して言及されたこともあり、これからはリズムとテンポの変化に富み、技と動きが一連の作品のようにつながりのある演技が一層求められると考えられる。したがって、高難度の技を盛り込んでも、単調で動きに工夫のない演技では評価が得られないため、リズムとテンポの変化があり、多様で複雑な動き、それらの一連のつながりにも時間をかけてトレーニングする必要がある。

平均台は上位の成績を残すことができたという今大会の結果を前向きに受け止め、当該種目を日本チームの得点源としていくため、パリオリンピックに向けた新ルールによる強化策及び長期的視点でのジュニア世代の強化策について、具体策を検討していくことが求められる。

＜ゆか＞

【団体予選結果】※各国上位３選手の得点

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**ROC**	13.633	14.000	14.000	41.633	13.878	5.8	5.6	5.8	**2**	5.73	7.833	8.400	8.200	**3**	8.144
2	**USA**	14.133	13.566	13.466	41.165	13.722	6.7	5.9	5.6	**1**	6.07	7.733	7.666	7.966	**11**	7.788
3	**GBR**	13.800	14.033	12.766	40.599	13.533	5.4	5.5	5.4	**4**	5.43	8.400	8.533	7.666	**2**	8.200
4	**JPN**	13.333	13.933	13.333	40.599	13.533	5.4	5.8	5.3	**3**	5.50	7.933	8.133	8.033	**7**	8.033
5	**ITA**	13.033	14.166	12.700	39.899	13.300	5.0	5.9	4.9	**5**	5.27	8.033	8.266	7.800	**6**	8.033
6	**CHN**	12.666	13.366	13.433	39.465	13.155	5.0	5.3	5.3	**7**	5.20	7.766	8.066	8.133	**8**	7.988
7	**BEL**	12.766	13.566	12.933	39.265	13.088	4.6	5.0	4.8	**12**	4.80	8.166	8.566	8.133	**1**	8.288
8	**CAN**	13.533	13.033	12.600	39.166	13.055	5.1	5.4	4.9	**8**	5.13	8.433	7.633	7.700	**9**	7.922
9	**NED**	13.133	12.900	12.866	38.899	12.966	5.0	4.9	4.7	**11**	4.87	8.133	8.000	8.166	**4**	8.100
10	**GER**	13.200	12.733	12.933	38.866	12.955	5.3	4.6	4.8	**10**	4.90	7.900	8.133	8.133	**5**	8.055
11	**FRA**	12.733	13.166	12.900	38.799	12.933	5.1	5.4	5.2	**6**	5.23	7.733	8.066	7.700	**10**	7.833
12	**ESP**	12.866	12.566	12.533	37.965	12.655	5.1	5.1	5.2	**9**	5.13	7.766	7.466	7.433	**12**	7.555

【団体決勝結果】

種目順位	国名	種目スコア					Dスコア					Eスコア				
		選手A	選手B	選手C	合計	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均	選手A	選手B	選手C	順位	平均
1	**ROC**	14.166	13.966	13.366	41.498	13.833	5.7	5.7	5.1	**2**	5.50	8.466	8.266	8.266	**1**	8.333
2	**ITA**	13.166	13.100	14.100	40.366	13.455	5.2	5.0	5.8	**4**	5.33	7.966	8.100	8.300	**4**	8.122
3	**GBR**	13.700	13.833	12.800	40.333	13.444	5.4	5.6	4.9	**6**	5.30	8.400	8.233	7.900	**3**	8.178
4	**JPN**	12.800	14.066	13.200	40.066	13.355	5.3	5.8	5.4	**2**	5.50	7.500	8.266	7.800	**6**	7.855
5	**FRA**	13.000	13.700	13.100	39.800	13.267	5.2	5.6	5.2	**4**	5.33	7.800	8.100	7.900	**5**	7.933
6	**BEL**	13.366	12.900	13.066	39.332	13.111	4.8	4.9	4.8	**8**	4.83	8.566	8.000	8.266	**2**	8.277
7	**CHN**	13.166	12.866	13.133	39.165	13.055	5.2	5.3	5.3	**7**	5.27	7.966	7.566	7.833	**7**	7.788
8	**USA**	11.700	13.666	13.500	38.866	12.955	5.7	5.7	5.6	**1**	5.67	6.600	7.966	8.000	**8**	7.522

１．日本チームの当該種目成績

１）団体予選・決勝について

予選において総合８位で決勝に進んだ日本チームの当該種目の成績は、出場 12 か国中４位であった。決勝においては日本の３選手とも大過失のない演技であったが高得点を獲得するには及ばず、当該種目では８か国中４位であり、E スコアにおいては６位の成績であった。

２）種目別決勝について

決勝に進出した村上選手は、音楽に合わせて身体全体を大きく使いながら表情も豊かで演技を心から楽しんでいることが皆に伝わる素晴らしい実施であり、高難度の技もミスなく行い完成度の高い演技が評価され、銅メダルに輝いた。

２．D スコアについて

日本チームの D スコアのチーム得点は、予選 16.5（平均 5.50）で３位、決勝 16.5(平均 5.50)でロシアと同点の２位であった。

種目別決勝では、優勝した CAREY 選手(USA)は予選 6.30、決勝 6.40 で群を抜く高い D スコアを有していた。村上選手は難度点や組み合わせ点を取りこぼすことなく演技し、D スコアでは２位（5.90)であったが、８名中４名の選手が村上選手と同じく 5.90 の D スコアであった。

種目順位の上位３チーム（ROC・ITA・GBR）と日本との D スコア内容比較及び種目別決勝選手の D スコア内容比較は以下の通り。

１）DV について

団体決勝上位国では各選手とも 2.60～3.70 と幅があったのに対し、日本の各選手は 3.10～3.60 であり、日本チームは高難度の技で構成することができていた。

種目別決勝における各選手の DV は 3.00～4.20。村上選手は 3.70 であった。

【団体決勝上位国と日本の DV】

	選手A	選手B	選手C	合計DV
ROC	3.6	3.7	3.0	10.3
ITA	3.2	3.0	3.5	9.7
GBR	3.3	3.5	2.6	9.4
JPN	3.1	3.6	3.1	9.8

【種目別決勝出場選手の DV】

種目別順位	選手名	DV
1	CAREY (USA)	4.2
2	FERRARI (ITA)	3.6
3	村上　(JPN)	3.7
3	MELNIKOVA (ROC)	3.8
5	ANDRADE (BRA)	3.7
6	GADIROVA Jessica (GBR)	3.5
7	GADIROVA Jennifer（GBR)	3.0
8	LISTUNOVA (ROC)	3.2

２）CV について

団体決勝にて ROC は 0.10 獲得が 2 名、ITA は 0.30 獲得が 1 名、GBR は 0.10 獲得が 2 名、0.30 獲得が 1 名と CV の獲得が比較的に少ないことに対し、日本チームは 0.20 が 2 名、0.30 が 1 名であり、高い D スコアを獲得するためにアクロバット系の技の組み合わせを複数取り入れていた。

種目別決勝では、0.10 獲得が 4 名、0.20 獲得が 2 名、0.30 獲得が 1 名。村上選手は 0.20 の獲得であった。

【団体決勝上位国と日本の CV】

	選手A	選手B	選手C	合計CV
ROC	0.1	-	0.1	0.2
ITA	-	-	0.3	0.3
GBR	0.1	0.1	0.3	0.5
JPN	0.2	0.2	0.3	0.7

【種目別決勝出場選手の CV】

種目別順位	選手名	CV
1	CAREY (USA)	0.1
2	FERRARI (ITA)	0.3
3	村上　(JPN)	0.2
4	MELNIKOVA (ROC)	0.1
5	ANDRADE (BRA)	0.2
6	GADIROVA Jessica (GBR)	0.1
7	GADIROVA Jennifer（GBR)	0.1
8	LISTUNOVA (ROC)	-

３．E スコアについて

すべての競技で実施された 141 演技（予選 85 演技、団体決勝 24 演技、個人総合決勝 24 演技、種目別決勝 8 演技）のうち、8.000 以上の E スコアを獲得したのは 57 演技（予選 26 演技、団体決勝 13 演技、個人総合決勝 11 演技、種目別決勝 7 演技)、全体の約 40%であった。日本チームは、予選では E スコア平均 8.033 であったが決勝では平均 7.855 と 8.000 を下回った。決勝では、アクロラインの着地の姿勢の欠点や余分なステップが複数箇所でみられ、さらに、ターン実施後にバランスを崩したり、技ではない部分でのつま先の緩みが所々で見られたりしたことが E スコアを伸ばせなかった要因であると思われる。

種目別決勝においては、8 名中 7 名が 8.000 以上獲得しているが、その中で村上選手は、アクロバット系の技の着地を最低限の欠点に抑えた実施で E スコア同率 3 位の 8.266 という比較的高い評価を得ることができた。採点指針で掲げている「安定感のある技の実施による完成度の高い演技」そして「観衆を魅了することができる芸術作品として完成度の高い演技」が評価されたと言える。

４．ライン減点について

予選 85 演技中 18 演技（0.10 の減点 9 演技・0.30 の減点 9 演技)、団体決勝 24 演技中 3 演技（0.10 の減点 2 演技・0.60 の減点 1 演技)、個人総合決勝 24 演技中 4 演技（0.10 の減点 2 演技・0.30 の減点 1 演技・0.40 の減点 1 演技)、種目別決勝 8 演技中 2 演技（0.10 の

減点２演技）であった。個人総合決勝では優勝の LEE 選手(USA)と 2 位の ANDRADE 選手(BRA)の 4 種目合計得点の点数差は 0.135 と僅差であり、ANDRADE 選手(BRA)は 0.40 のライン減点があり、この減点で明暗が分かれたことは明らかである。

５．所感

今大会全体を通して特にアクロバット系の着地の乱れに対する減点が厳密になされていた印象である。注目したいのがこれまでゆかを得意としてきていた USA のスコアである。種目順位、チームの D スコア E スコアを見れば分かるように、D スコアは予選決勝共に圧倒的な差をつけて 1 位であるのに対し、E スコアではチーム 3 名とも着地の乱れが目立ち減点が嵩み得点を伸ばすことができず、E スコアだけの順位は予選 12 チーム中 11 位、決勝では最下位に終わっている。ここ近年の傾向でもあるが、ゆかにおいては特にアクロラインの着地をいかにまとめるかはかなり重要である。

また、ダンス系の技の正確さや姿勢についても減点が嵩んだ要因の一つであると言える。高い難度の技を実施できてもつま先や膝の緩みが目立ったり開脚不足であったりすれば獲得する難度点を上回る減点が発生してしまう。今大会 USA はアクロラインの着地の減点だけでなく、ダンス系の技や演技全体の姿勢で減点が発生してしまい、優勝した ROC とは差がついてしまったと言える。チームで金メダルに輝いた ROC は D スコアにおいては種目順位は日本と同率 2 位であるが、アクロバット系の技の完成度の高さや姿勢の美しさが評価され E スコアを上げ種目順位も 1 位であった。日本が目指すべき方向性はこの USA と ROC の違いを見れば明らかであり、闇雲に D スコアを上げるだけを目標にせずこれまで通り美しい姿勢での演技を目指し強化をしていかなければならない。

今大会、印象に深く残っていることは、毎回審判会議で審判長の Donatella SACCHI 氏が「我々審判は、ゆかの演技において、アクロバット系の技、ダンス系の技、そして芸術性の評価をきちんと行うことであり、身体全体を大きく使って動くことや、その動きと音楽との調和、エレガントで優雅さを表現している芸術的作品価値の高いものを高く評価していくことがこの先の女子体操の発展のために大切である。」と話していたことである。ゆかは、高難度の技、特にアクロバット系の技をこなせる力を備えているだけではゆかとして高い評価を得られるものではないことは明らかであり、それぞれの技と調和した表現や振り付けと音楽で芸術作品としての演技を実施するという意識をより一層高く持ちトレーニングに励む必要がある。芸術性を高めるためにも美しい立ち姿勢は重要であり、その姿勢(頭部・胴体・肩の位置・足先まで神経の行き届いた体線)から生み出される動きはどんな瞬間でも美しく、観客を魅了するものである。美しい立ち姿勢をつくるのは、時間を要することであるが、審判長の Donatella SACCHI 氏のメッセージに込めた思いや、体操本来のあり方に立ち返り、日本の選手も真剣に取り組む必要がある。

以上

第 50 回世界体操競技選手権大会審判員報告

審判委員会体操競技女子審判本部
副本部長　黒須真希
本部員　　高橋洋子

開催地：福岡県北九州市

大会期日：2021 年 10 月 14 日(木)～10 月 24 日(日)

会場：北九州市立総合体育館

スケジュール：

10 月 14 日(木)　女子審判会議、抽選(予選)
10 月 15 日(金)　女子ポディウム
10 月 16 日(土)　女子ポディウム、男子ポディウム
10 月 17 日(日)　男子ポディウム
10 月 18 日(月)　女子競技　予選 1 日目
10 月 19 日(火)　女子競技　予選 2 日目、男子競技　予選 1 日目
10 月 20 日(水)　男子競技　予選 2 日目
10 月 21 日(木)　女子競技　個人総合決勝、抽選(個人総合決勝)
10 月 22 日(金)　男子競技　個人総合決勝
10 月 23 日(土)　男女競技　種目別決勝 1 日目、抽選(種目別決勝)
10 月 24 日(日)　男女競技　種目別決勝 2 日目

参加国：

選手　40 か国　112 名

審判　37 か国　49 名(D 審判 8 名、R 審判 8 名、帯同審判 33 名)

審判編成：

今大会では FIG 技術委員は以下のように配置されていた。

審判長　Donatella SACCHI

上級審判員　Tatiana Borisovna PERSKAIA

スーパーバイザー　跳馬　Elena DAVYDOVA

段違い平行棒　Qiurui ZHOU

平均台　Johanna GRATT

ゆか　Liubov ANDRIANOVA

各種目の D 審判団は事前に FIG 技術委員より指名され決定しており、全競技を通して同じ種目を担当した。

審判抽選：

今大会では、予選の抽選は審判会議当日に、個人総合決勝の抽選は競技当日に、種目別決勝の抽選は種目別決勝の 1 日目にすべての種目の抽選が行われた。抽選は、R 審判、E 審判、アシスタント、補審の順で行われた。R 審判の 8 名は FIG より事前に指名されており、それぞれの競技ごとに担当種目を抽選で決定し、E 審判、アシスタント、補審は参加国の帯同審判の中から抽選で決定された。

個人総合決勝の抽選は、予選でアシスタントと補審に入った国がまず優先的に行われ、次に 2 名の帯同審判を派遣している国が優先的に行われたため、今大会はすべての帯同審判が全競技を通して少なくとも 1 回は E 審判に入ることができた。

種目別決勝の抽選は、規則に従い、出場国の審判とカテゴリー3 の審判を除いて行われた。日本の抽選結果は以下の通り。

予選：　ゆか　E3　黒須真希

個人総合決勝：　平均台　E3　高橋洋子

種目別決勝：　跳馬　E1　黒須真希

審判会議：

今大会の審判会議および審判抽選はオンラインで行われた。まず競技会の 2 週間ほど前に、FIG によるオンライン上の審判教育プラットフォームにアップロードされた研修用の映像を採点し、減点を指定されたフォームに入力して技術委員長に送るよう指示があった。

審判会議では、各種目のスーパーバイザーより E スコアに関する内容の説明および事前に採点した研修用映像の減点の確認、解説が行われた。現行ルールを適用する最後の競技会であり、特に新しい情報はなく、これまで説明を受けてきたルールの再確認のみであった。

各競技の直前には種目ごとにスーパーバイザーによる打ち合わせが行われた。平均台では、各技の実施減点に加え、身体の姿勢が悪い演技やつま先が伸びない、つま先立ちでの運動や動きに欠ける演技については演技全体を通して「身体の姿勢が悪い」の減点項目を適用すること、芸術性と構成の減点にも注視して採点すること、ゆかでは芸術性と構成の減点について注視して採点すること、アクロバット系の技やダンス系の技の高さについても減点があるものは減点をすること、つま先が伸びない実施については演技全体を通して「身体の姿勢が悪い」の減点項目を適用することなどの説明があった。

各種目の傾向と今後の課題について：

跳馬

【傾向】

跳馬では、第 2 空中局面での「伸身姿勢を保てない」の減点項目と着地での減点項目を厳密に減点される傾向であり、すべての競技で実施された全 149 跳躍のうち、9.000 以上の E スコアを獲得したのは 20 跳躍で全体の 13.5%、8.500 以上 9.000 未満は 97 跳躍で 65%、8.500 未満が 32 跳躍で 21.5%であった。特に第 2 空中局面でひねりを伴う技においては、いかに伸身姿勢を保ったままひねりを完了し、直立に近い姿勢で安定した着地ができているかによって E スコアが大きく左右しており、9.200 以上の E スコアを獲得したのはブラジルの ANDRADE 選手とアメリカの DI CELLO 選手の 2 名のみであった。他にも第 2 空中局面の高さと迫力のある跳躍がいくつか見られたが、膝の曲がりや脚の開き、ひねりを伴う技での脚の交差などの欠点がある実施については厳密に減点がなされており、姿勢欠点がなく着地姿勢の高い安定した着地でなければ 9.000 以上の E スコアを獲得することはできない傾向であった。

【課題】

今後、日本が団体総合や個人総合で上位に食い込むためには、最低でもロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり、伸身ツカハラとび 2 回ひねり、前転とび～前方伸身宙返り 1 1/2 ひねりなどの D スコア 5.40 以上の跳躍技の習得が必須である。しかし、近年の国際大会における跳馬の採点の傾向を見ると、姿勢欠点のある実施や着地での欠点がある実施については厳密に減点がなされており、姿勢欠点のない実施でなおかつ第 2 空中局面での高さと迫力のある完成度の高い実施でなければ高得点は獲得できない。ここ数年、日本では採点指針として「D スコアの高い跳躍技の実施」を掲げており、D スコア 4.60 以上の跳躍技を実施する選手は確実に増えてきているが、9.000 以上の E スコアを獲得できるような姿勢欠点のない完成度の高い実施や、より高い D スコアの跳躍技へとつながっていくような余裕のある実施はほとんど見られないのが現状である。今大会、ポディウム練習や競技直前の練習において、各選手がアップで行う伸身宙返りを見たが、9.000 以上の E スコアを獲得している選手と 8 点台の選手の跳躍を比較すると、助走のスピード、踏み切りから着手の速さ、着手から最高点に到達するまでの速さ、そして第 2 空中局面の高さが大きく違っていた。特に E スコア 9.400 を獲得していたブラジルの ANDRADE 選手の伸身宙返りは全体のスピード、高さともに別格であった。今大会は実施しなかったが、ANDRADE 選手はロンダート

後転とび～後方伸身宙返り２1/2 ひねりを実施できる選手であり、そのレベルの伸身宙返りを実施できなければ 2 回ひねりを実施しても高い E スコアを獲得することができず、さらに２1/2 ひねりを習得することもできないということを痛感した。日本全体で跳馬を強化していくにあたり、確実に 9.000 以上の E スコアを獲得できるようにするためにまずは基本となる助走やホップ、踏み切りの技術の修正も含め全体のスピード、迫力、着手からの鋭い突き上がりのある跳躍を目指していく必要があると感じた。

段違い平行棒

【傾向】

今大会、すべての競技で実施された 114 演技のうち、8.000 以上の E スコアを獲得したのは 27 演技で全体の 24%、7.500 以上 8.000 未満は 22 演技で全体の 19%、7.000 以上 7.500 未満は 26 演技で全体の 23%、7.000 未満は 39 演技で全体の 34%であった。

段違い平行棒の採点は、脚の開きや、腕の曲がり、膝の曲がりや倒立の角度など厳密に減点されている印象だった。演技の構成上、低棒で内向きに方向を変える時や終末技の前に倒立 1/2 ひねりを実施している選手が複数いたが、角度の減点を 0.10 以内に抑えられる選手と 0.30 や 0.50 の減点がある選手では E スコアに差が出ていた。また、「け上がり」「振り上げ倒立」に欠点のある選手は落下などの大過失がなくても 6 点台になる演技だったが、そのような選手は非常に少ない印象があった。

ポディウム練習と競技会を通しての全体的な印象として、倒立の姿勢が良く、振幅の大きさがある選手が非常に多いこと、またひねりを伴う技において倒立局面でひねりを完了できている選手が多い印象を持った。また、演技構成の面では、E 難度以上の空中局面を伴う技や低棒から高棒へ移動する D 難度以上の技（シャポシニコヴァ系の技）を実施している選手が非常に多かった。特に気になったことは、団体総合では上位に位置していない国であっても、段違い平行棒に関しては日本よりも難度の高い技に取り組んでいることである。今後 D スコア E スコアともに高いスコアを獲得できそうな取り組みをしている国が多いことに危機感を抱いた。

【課題】

ここ数年、日本の段違い平行棒に関して他の国と比べて遅れをとっていることを課題として挙げてきているが、今大会においてもその状況に変わりはないと感じた。今大会、段違い平行棒の予選に出場した畠田選手は D スコア 6.00、E スコア 7.933、13.933 を獲得しているが、国内の選手を考えた時に 14.000 近いスコアを獲得できる選手がほとんどいないことが現状である。5 年ほど前から D スコアを上げていくために「多様な空中局面を伴う演技構成」や「組み合わせ点を獲得できる演技構成」という項目を採点指針として挙げてきた結果、複数の空中局面を伴う技や組み合わせ点を演技構成の中に組み入れる選手が少しずつ増えてきた。しかし、E スコアの面から考えると課題が山積みで、「け上がり」「振り上げ倒立」「車輪」といった演技の中に複数回使われる技での膝、つま先、腕の曲がりがある選手が多いことや「ひねりを伴う技」の角度が乱れる選手が多いことが現状である。段違い平行棒は演技に入っている１つ１つの技の姿勢欠点や角度の減点をなくしていくことで E スコア

は着実に上げていくことはできるため、まずは今の構成で演技を実施した場合の減点を 2.00 以内に抑える努力をしていく必要がある。

今後、メダル獲得を目指していくことを考えれば、段違い平行棒の種目別決勝でメダルを獲得している 15.000 以上を目指さなければならない。そのためには、D スコア 6.50 以上、E スコア 8.500 以上を獲得できる演技を目指していくためにジュニア層の選手の強化から取り組んでいかなければならない。

平均台

【傾向】

平均台では「平均を保つための余分な動き(0.10/0.30.0.50)」の減点項目やダンス系の技での「身体の姿勢(0.10/0.30/0.50)」の減点項目を厳密に減点される傾向であり、すべての競技で実施された全 127 演技のうち、8.000 以上の E スコアを獲得したのは 10 演技で全体の 8%、7.500 以上 8.000 未満は 25 演技で 20%、7.000 以上 7.500 未満は 23 演技で 18%、7.000 未満が 69 演技で 54%であった。7.000 未満の多くは大過失がある演技であったが、大過失がなくてもふらつきの有無や、ダンス系の技の正確さによって E スコアが左右する傾向であった。8.000 以上の E スコアを獲得した演技は、大きくバランスを崩す過失がなく、ダンス系の技においても美しい姿勢での正確な実施であり、1 つの技での減点を 0.20 以内に抑えられた演技であった。また立ち姿勢やつま先立ち、脚のラインも美しく、技以外の姿勢や動きなどの芸術性においても魅力を感じる演技であった。

一方、大過失がなくても E スコアが 7 点台前半や 6 点台であった演技に共通していたのは、0.30 や 0.50 の減点を伴うふらつきが複数回あったこと、また大きなふらつきがなくてもダンス系の技で 0.30 以上の減点を伴う技が複数入っていたことである。特に脚交差した前後開脚とび 1/2 ひねり、横向きでのひねりを伴うジャンプ、片足踏み切り前後開脚とびでの不正確な実施が目立っていた。

また、今大会、最も印象に残ったのは、立ち姿勢や脚のラインが美しい選手が多かったことである。実際の競技ではバランスを崩す過失や大過失があったことにより結果的に E スコアは伸びなかったが、特に韓国、スウェーデンの選手はどの選手も膝、つま先、立ち姿勢、つま先立ちの姿勢が美しく、技だけではなく身体の姿勢の部分にも重点を置いたトレーニングを行っていることがうかがえた。

【課題】

今大会、種目別決勝に進出した 9 名の予選での D スコアの平均は 5.65、E スコアの平均が 8.066 であったことからも、平均台で高得点を得るためには高い D スコアを獲得することはもちろんであるが、確実に 8.000 以上の E スコアを獲得することができる演技を目指すことが必須である。そのためには、ダンス系の技の減点を最小限に抑えることが重要であり、明らかに「身体の姿勢」で 0.30 の減点を伴うようなダンス系の技は避けて演技を構成するべきであると考える。また、演技を採点している中で、膝つま先の美しさや立ち姿勢の美しさが演技の芸術性に強く関連しているということを実感した。上体の姿勢が悪い、身体に張りがない、高いつま先立ちができていない、つま先が伸びていない演技からは全く芸術

性は感じられなかった。今大会において日本選手は安定感のある確実な演技により芦川選手が金メダル、村上選手が銅メダルを獲得することができたが、近年の国内の競技会、特にジュニアの競技会を見ていると、立ち姿勢が美しくない選手や常に膝つま先が緩んでいる選手が非常に多く、近い将来、日本は世界の上位で戦うことが難しくなるのではないかと危機感を抱いている。確実に 8.000 以上の E スコアを獲得できる演技を目指すために、まずは美しい姿勢で立つこと、歩くこと、高いつま先立ちをすることなどの基本に日本全体で取り組んでいかなければならないと強く感じた。

ゆか

【傾向】

今大会、すべての競技で実施された 114 演技のうち、8.000 以上の E スコアを獲得したのは 28 演技で全体の 25%、7.500 以上 8.000 未満は 45 演技で全体の 39%、7.000 以上 7.500 未満は 20 演技で全体の 18%、7.000 未満は 21 演技で全体の 18%であった。ゆかの採点では、数多くある減点項目の中で特に大きく影響していたのは、アクロバット系の技の着地とダンス系の技であった。アクロバット系の技の着地については、低い姿勢での着地、大きなステップやとびがある場合には、１つの技の着地で 0.30～0.50 の減点が発生する。また、ダンス系の技においては規定された姿勢に到達できない（例えば 180 度の開脚や、輪の姿勢など）実施や、膝やつま先が伸びない実施では１つの技で 0.30～0.50 またはそれ以上の減点をされていた。

今回、予選に出場した 82 名については、E スコア 8.000 以上を獲得した選手が 16 名で、16 名の選手の演技では、明らかに 0.30 以上の減点があった技が 2 つ以上ある選手はいなかった。また、転倒などの大過失を除いて 3.00 以上の減点があった選手は 6 名で、この 6 名の演技では明らかに 0.30 以上の減点があるところが 3 か所以上であった。

また、今大会で特につま先のラインが美しいと感じた選手は WILLIAMS Jennifer 選手（SWE）で１つ１つの技の姿勢はもちろん、技以外のステップやコーナーへの移動、動きも含めて、つま先まで意識されたとても美しい印象だった。また、WONG Leanne 選手（USA）と LEE Yunseo 選手（KOR）は動き１つ１つの美しい姿勢や表情を含めて魅力的な演技をしていたと感じた。

【課題】

今大会、予選でゆかの E 審判に入ったが１つ１つの技の完成度が高く、膝つま先まで意識ができている選手であれば E スコア 8.000 以上を獲得できているように感じた。今回、日本選手は予選に出場した３名全員が 8.000 以上の E スコアを獲得し、村上選手、平岩選手が決勝へ進んでいるが、国内競技会の様子を考えると、課題のある選手が多いように感じる。特に気になることは膝つま先の意識が低い選手が多いように感じることと、ダンス系の技の減点が多いことである。今回、2 日間のポディウム練習で全選手の演技を見たが、明らかに開脚が不十分なジャンプであったり、膝つま先を伸ばせていない選手は数名しかいなかった。今回の出場選手の中にはオリンピックには出場できなかった国や選手がいるため、D スコアについては 4.90 以下だった選手が約 73%（60 名）だったが、姿勢の意識ができていて、１

つ１つの技を丁寧に練習している国がとても多かった。数年前から国内では立ち姿勢や膝、つま先などの姿勢についてや、ダンス系の技の減点については採点指針に掲げてさまざまな場面で指摘してきているが、まだ姿勢に対しての意識が低い選手が多くいることが現状である。また、欠点が多い技を演技構成の中に入れていることによって、減点合計を増やしている選手もいる。今大会で 8.000 以上を獲得した選手は８技～10 技（ロンダート、後転とび、前転とびを除いて）で構成されていた。演技の中に入っているすべての技が減点の対象になるため、欠点が多い技を入れていたり、技を余分に入れていたりすれば、減点が増える可能性があることは当然である。今大会、すべての演技のうち E スコア 7.500 以上を獲得しているのが 64%であり、減点のない演技ができればそれ相応のスコアが獲得できるということを踏まえて、演技構成を組んでほしい。

さらに、今大会の審判に入り、魅力を感じる選手とそうでない選手は、立ち姿勢、膝、つま先、身体のはりや力強さに違いを感じた。立ち姿勢が悪い選手や膝つま先が伸びていない選手は、振り付けの工夫をしていたり表情まで意識して動いていたとしても魅力はまったく感じなかった。芸術性の減点をされないためには、まず美しい姿勢での演技ができなければならないと改めて感じた。

全体を通して

今大会は東京オリンピックを終えて最初の世界選手権であり、次のパリオリンピックへ向けてスタートになる大会であった。日本選手は予選で、畠田選手は個人総合 4 位、村上選手は平均台 9 位、ゆか 1 位、平岩選手はゆか 6 位、芦川選手は平均台 6 位という結果ですべての選手が決勝へ進んだ。畠田選手は怪我により残念ながら決勝は欠場となったが、平均台は芦川選手が金メダル、村上選手が銅メダル、ゆかでは村上選手が金メダルを獲得し、輝かしい結果を残してくれた。

出場した 4 選手は素晴らしい結果を残してくれたが、パリオリンピックへ向けてスタートをきった今大会の他の国の状況を見ると、日本の課題が浮き彫りとなった。ここ何年も課題として挙げている点については各種目のところで述べたとおりだが、すべての種目に共通することは、確実に高い E スコアが獲得できるように完成した状態で競技会へ出場することを目指さなければならないことである。跳馬では減点を 1.000 以内に抑えること、段違い平行棒、平均台、ゆかでは減点を 2.000 以内に抑えることを考え、まずは１つ１つの技の減点を減らしていくことに取り組まなければならない。特にジュニア層の選手は高難度の技ができなくても、これからのベースとなる立ち姿勢、膝、つま先、指先まで意識された常に美しい姿勢での演技ができるようにトレーニングを積み、E スコアを 8.000 以上獲得できる演技を目指してほしい。2024 年のパリオリンピック、さらに 2028 年のロサンゼルスオリンピックに向けて、一貫性のある長期的な計画のもとで強化を図っていただきたいと感じた。

以上